

伊藤亜聖著

『現代中国の産業集積
——「世界の工場」とボトムアッ
プ型経済発展——』

名古屋大学出版会 2015年 iii+226 ページ

おお ほん もり き
大 原 盛 樹

はじめに

巨大な中国を下から俯瞰する——労働集約型発展の典型というべき中国の産業発展が21世紀に入ってからどのような方向に向かおうとしているのかを、詳細な現地調査、広範な文献サーベイ、そして緻密なデータ分析によって検証する力作である。

本書が行うのは「中国経済という巨大な対象を、『世界の工場』中国説を下敷きにしつつ、……産業集積の視角から、その全体像をつかもうとする試み」(4ページ)である。『「世界の工場」中国説』とは、黒田[2001]が2000年代初頭に予想した、中国が「雁」の群れを乱す「鵬」(おおとり)になるというイメージでよく表現される。すなわち、他に類のない巨大市場と階層のかつフルセットの生産基盤をもつ中国では、上は資本集約的な基礎工業やハイテク産業、下は労働集約的な軽工業まで、ほぼすべての分野で高い競争優位を維持できる。そのため、これまで東アジア諸国でみられた成熟産業の後発国への移転は停滞し、中国以後の後発国の発展は押しとどめられる、というものである。

その課題をよりよくとらえるには、本来、最も先に中国で優位性を失い後発国に移転されるべき労働集約的産業、そのなかでもとくに典型的な「雑貨」産業を観察したらよいだろう。

結論を言えば、中国の強力な「雑貨」生産を支えてきたのは、多数の民間企業の集積地とそこで形成された独特の供給システムである。それは長い商業の歴史や地方性、そしてなにより中国市場の懐の大

きさや多層性に支えられ、形成された産物である。そして中国の主要な集積地は、2000年代以降に顕著になった「新常态」ともいわれる中国経済の新しく大きな変容——労賃の高騰、労働者保護と雇用安定化の模索、社会福祉政策の進展と格差の縮小傾向、消費の高度化と多様化、イノベティブな活動の増大、等々——のなかで、さらに競争力を維持すべく変化を続けている。本研究が詳細な現地調査と実証分析を組み合わせ、鮮やかにかつ説得的に読者に提示するのは、そのような底辺からわき上がる中国産業のダイナミックな変化の過程である。

これまで中国の産業発展は多大な注目を集め、多くの研究成果が生み出されてきたが、本書はそれらの主要なエッセンスを幅広くまとめたうえで、さらに独特の視点からバージョンアップさせた、優れた、信頼性の高い、本格的な中国産業論である。

I 本書の構成と要約

本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 「世界の工場」中国の形成と変動——課題と視角——
- 第1章 体制移行と雑貨産業——供給不足から産業集積の形成へ——
- 第2章 闇市から雑貨の殿堂へ——浙江省義烏市に見るボトムアップ型産業発展——
- 第3章 郊外農村から照明器具の都へ——広東省中山市古鎮鎮に見る近隣産業基盤の意義——
- 第4章 「世界の工場」中国の再編——立地変化と事例研究——
- 終章 「世界の工場」は終わるのか——大国における産業集積の形成と再編——

以下に各章の内容を要約する。

「序章」は本書の意義と視角を紹介する。既存研究と異なる本書の特色は、沿海地方で民間企業が集積してできた多数の産地が形成する中国の労働集約的産業の、労賃が高騰し格差が縮小し始めた「2000年代半ば以降の変化」を分析することにあるという。雑貨という典型的な労働集約的製造業の近年の分析を通じて、中国における集積、沿海部、労働集約的産業の将来を展望する、としている。

著者によれば、本研究の特色は以下の3点である。
 ①民営企業の重視：産業発展の担い手として社会の末端から勃興した民間企業の役割に注目し、中国産業の重要な部分が「ボトムアップ」的に形成されたことを確認する、②国土の広大さが産業集積に与える影響への注目：2000年代以降、既存の産業集積地が機能を高度化させるとともに、より要素コストが安い外部への重層的な拡張がみられることを指摘する、③中国の労働集約的産業の発展過程の俯瞰：中国で同産業が発展した経緯を、国内市場の大きさと沿海部の環境の優位性、さらに各産地が固有にもつ歴史的な背景まで加えて包括的に理解する、という諸点である。

第1章は、前半部で雑貨産業の発展の経緯を歴史的に解説する。1950～70年代の計画経済期には重化学工業化の下で日用消費財の生産は軽視され、供給不足が常態化していたこと、1970年代後半頃から沿海部の民営企業（この頃はおもに「郷鎮企業」といわれた）がこの分野を担うことで供給不足が解消したことが指摘される。それを担った民営企業が資金制約と農村の豊富な労働力という要素賦存の条件下で極めて労働集約的な技術を使っていたと指摘する。後半は国内需要に対応する民間企業中心の浙江省と、外国とのつながりが大きかった広東省の主要な産業集積の概況を紹介する。

第2章と3章は2つの雑貨集積地のミクロレベルのケーススタディである。両産地の歴史と地域性を、既存資料を丹念に整理しながらまとめ、最も重要である地方政府の政策の役割と企業家の行動の詳細を明らかにする。

第2章は、世界最大の雑貨の卸売市場となった浙江省の義烏市に注目し、同地での雑貨商の集積過程と競争力の源泉、そして近年の変化を詳細に描写する。いくつかの雑貨商の成長過程を描写しながら、まず同地が「義烏システム」というべき、開放的で多様な生産組織を結びつけるネットワーク機能をもつ独特な卸売市場となっていることを指摘する。また国内外のバイヤーへの独自のアンケート調査により、品質よりも豊富な品揃え（多様性）と低価格が同地の製品の国際的な競争優位の源泉になっていることを明らかにする。そのうえで、なぜ同地がこのような発展をみせたのかについて、「鶏毛換糖」（当地の農民の伝統的な物々交換による行商）という商

業の伝統、地方政府の政策およびそこでの先見性をもつ重要人物の役割、近隣地域にある多様な特定製品の製造産地とのネットワークの可能性という同地特有の存立基盤を説明する。

第3章は、古い商業の伝統の上でできた義烏と異なり、この10数年で中国有数の照明器具の集積地になった広東省の珠江デルタにある中山市古鎮鎮の事例を紹介する。第2章と同様、ヒアリングをしたいくつかの代表的な企業の成長過程の描写により、産地を形成させた基盤を明らかにする。浙江省と同様に、ここでも近隣に多数の材料や部品を供給する専門的な集積地が存在し、それらをフレキシブルに調達して多様な製品供給を行うことが同地の産地化の基盤になっている。また流動的な企業が多数参入する開放性も重要である。多様な品種を安価に提供するための供給体制が整っていること、さらに、その部材のサプライチェーンが安価な労働力等の要素を求めて地理的に広がっていることが明らかにされる。

第4章は、中国全体で果たして集積化（具体的には各産業での東部沿海の既存産地へのシェアの集中）は進んでいるのか、それとも分散化（中西部のシェアの増加）しているのか、その原因は何か、という大きな傾向をミシガン大学の工業統計データを使ってマクロ的に実証している。

全国的にみて、産業を特定地域へ集積化させる諸要因（「集積力」）と他地域へ分散化させる諸要因（「分散力」）は、ひとつの経済の変容過程に複雑に混在している。著者はその諸要因を、①安価な労働力を求めて企業が内陸部へ生産現場を移転させる力（「国内版雁行形態」論的要因）、②国内の内陸部から沿海部への労働力移動を促進または抑制する力（ルイス論的要因：遠隔地での就労を求めた労働移動が促されれば産業の東部への集積が進むだろうし、輸送コストの低下や内陸部のインフラ充実などが地元での就業機会を増やせば、内陸での産業発展が進み、全国的には分散化が進むと考えられる）、③マーシャルが指摘した集積の経済性もたらす集積力、④政策の影響、の4つに分類する。そして、各省・各産業の生産額の全国でのシェアの変化率を被説明変数とし、当該省・産業の相対賃金率（この変数が高ければ同産業の他地域への分散を促すと予想できる）、相対的資本労働比率（中西部のみで推計

するとこの回帰係数が負、東部のみの推計では正になると予想できる)、産業の集積度合いを示す諸変数(雇用全国シェア等)、企業規模を示す1社あたり平均従業員数、機械化の進展を示す資本労働比率の増加率、利潤率を示す相対的固定資産利益率、さらに東部、中部、西部の地域ダミー変数を説明変数とする回帰分析を行う。そのうえで、各説明変数の回帰係数から上記の分散力および集積力の傾向について推定している。

結論は、産業移転と集積効果の2つの動きが同時に観察できるという。すなわち、①すべてではないが一部の有力な産地では当該製品の生産がますます集中化する傾向にあり、一方、②沿海部以外、とくに中部への産地の移転も進んでいる。この結果は、第3章までの個別の集積地でみられた不断のアップグレードによる産地としての競争力の強化と、その一方でみられた労働集約的な工程の産地外への移転や内陸産地から部材のより積極的な活用というサプライチェーンの外延化という現象と整合的だとしている。

終章でまとめを行う。2000年代にみられた中国の労働集約的産業の競争力の高止まりは、沿海部の主要産業集積地の供給能力の高度化によりもたらされたという。雑貨では世界最大の供給拠点となっているが、その国際的な優位性は、品質ではなく、小さく差別化されたバラエティの豊富さと価格の安さにある。中国全体の賃金上昇のなかで競争力の維持が可能になったのは、既存産地の高度化に加えて、国内の各種の産業集積との連携の強度が増し、労働集約的な工程と品目が国内の労働コストがさらに低い地域との分業が進んだことにあるという。そのような既存の集積地を起点とした分業の再編と空間的広域化を可能にした中国特殊な背景として、国土として、そして市場としての「大国性」があったことを指摘している。

II コメント

本書はしっかりとした既存研究のまとめと独自の現地観察、そして実証研究を組み合わせた本格的な中国産業発展論であり、中国の産業発展のダイナミズムの特色と将来を考察するうえで多くの人に参照されるべき重要な成果だと評者は考える。

中国の産業発展を経済成長過程の特色と関わらせて論じる既存研究の多くが、技術や市場開拓という能力の向上と取引関係等の制度的側面に焦点を当てていた。またその主役として企業や人的資源の側面が取り上げられた。一方、本研究が焦点を当てるのは集積地であり、それを形成してきた社会経済的あるいは国家的な諸要因による全体像である。技術はほとんど論じないが、そのかわり商業の仕組みや企業家の精神と行動、そして政府の政策的行動が厚く描写されている。分析の対象となる浙江省や広東省を中心とする各産地の歴史的背景と多様性も重視される。本書はあくまで産地を中心にした地域の総合的な理解をめざし、その背後にあって諸地域の発展経路を規定する研究対象国の何らかの特色を抽出しようという志向をもった研究だといえるだろう。

評者が感じた本書の第1の魅力はその豊富なレビューに基づく視角の広さと信頼性である。本書が渉猟した先行研究は広範にわたり、その解釈と整理の仕方は慎重かつ的確で、本研究が提示する全体像の信頼性を高いものにしていく。

文献サーベイに加え、現地調査、データ分析を深いレベルで総動員して全体像をバランスよく描き出している点も信頼性を生み出している。第2、3章では現地ヒアリングにもとづく厚みのある記述で産地のダイナミズムを浮かび上がらせた。そのうえで、第4章の全国レベルのマクロの計量分析でそのダイナミズムの方向性を確認している。近年、中国全体として産業集積地に産業は集中しているのか、分散傾向にあるのかは大きな関心事である。しかし技術や経営環境が異なる膨大な数の産地が、異なるベクトルをもつ諸要因により複雑に影響されるため、全体としての傾向をつかむのは難しい。そのなかで、ミクロの記述とマクロの実証を合わせて、沿海地域の産地の高度化と中西部地域への低付加価値工程の移管がおり、全体として産地の競争力を維持しているという側面を説得的に明らかにしたことは、本研究の重要な発見である。

本研究のとくに意義深い点は、近年の中国での「労働集約的産業の競争力の高止まり」を考察の軸にしている点である。本稿の冒頭で述べたように、本研究が検証するのは、今後も中国が「世界の工場」として「鵬」のような地位を占め続けるのかという問いであり、それを最もより直接的に体现する

典型的な労働集約的産業である雑貨生産のシステムと、それを支える東部沿海地域の産業集積地を考察したのである。本研究は、このような労働集約的産業こそ中国が真の国際的競争優位をもつ部分であり、産地を育てた社会経済的あるいは政治的諸要因に最も注目すべき中国的特色が現れると考えているように見受けられる。Sugihara [2007] にみられるように非西洋地域の経済発展において労働集約的製造業の役割の再評価が顕著になっている現在、なぜ中国が労働集約的製造業の世界的な中心になるのかを追求することは大きな意義がある。

ただし、Islam [2008] や Rodrik [2016] で議論されるように、労働集約的産業が持続的な経済成長をもたらすというのは世界的にみて普遍性をもつパターンではなく、むしろ地域特殊な事例だという主張を念頭に置く必要はある。中国の出現にかかわりなく、労働集約的製造業の勃興は日本等東アジアと一部東南アジアでしか実現されていない東アジアモデルだとみることにも可能である。本書は序章の図序-2等を使って、ASEAN 諸国に比べた中国の「労働集約的産業の高止まり」を指摘し、「鵬」が雁行形態を崩しているイメージの根拠にしている。しかし Islam [2008] の考え方にたてば、図序-2において、中国は日本、韓国、台湾の東アジア3国がこれまで経てきた軌道をそのまま遅れてたどっているとみることにもできる。そうだとすれば、少なくとも東アジア3国に比べて特異な労働集約的産業の「高止まり」が起こっているとはまだ言えないかもしれない。労働集約的産業の中国と東アジア3国の経験とのより詳細な比較が求められるであろう。

雑貨産業で世界中からバイヤーを集める中心地としての競争優位の内容と、世界の雑貨産業に与えた影響を論じている点も、本書の興味深いところである。中国のこれら産地の国際的な優位性は、品質よりも製品バラエティと低価格であった。この場所に来ればどんなものでも手に入るし、リクエストすれば数週間で新しいデザインの製品の大量供給が可能になる。オープンな義烏市場は大量の末端バイヤーを集結させ、従来のドバイや大阪などの業者を「中抜き」させることで、世界の卸売りビジネスを一変させた。中国の地場のビジネスが世界のサプライチェーンを大きく変えた典型事例を報告している。

基本的に評者は本書を高く評価しているのだが、

今後の期待、注目点を挙げるとすれば、既存研究にない新規性の高い視角をどう打ち出すか、そもそもそれを目指すかどうか、である。

「現代中国の産業集積」というタイトルを付けてはいるが、本研究は必ずしも中国の産業集積そのものを専門的に論じていない。産業集積の類型や形成のメカニズムについて理論的な背景を整理したり、独自のモデルを提示したりはしていない（中国全体の集積の傾向を検証するモデルを作って実証はしているが）。もとより中国でみられる多様な産業集積の全容の解明を目指しているわけではない。もしそれを目的とするなら、東部沿海地域の中小民間企業によるものだけでなく、たとえば伝統的な巨大企業とその周辺の企業群による「企業城下町型」の集積地や外資企業による集積地も考察に加える必要があるだろう。

既存研究を広く渉猟・整理したうえでよく練られた包括性をもつ成果であるためか、本書の内容にはある種の既視感を覚える場合が多かった。無論、雑貨や照明器具の産地の紹介や海外バイヤーの評価など個々の事例はオリジナルで新鮮である。ただ、それらを通じて浮かび上がらせた中国産業の全体的なイメージは、多くの既存研究で指摘されてきたものからそれほど離れていないようにみえた。たとえば評者もオートバイ産業等を中心に特定の産業に特化した国際比較を行ったが [Ohara, Vijayabaskar and Lin 2011], 本書の雑貨産業の観察で得られる中国産業のイメージと、その労働集約性や民間企業の主導性、狭い範囲の専門的産地との分業、広大な国内外のローエンド市場との関連も含めて、多くの点で共通している。義烏システムの内容については先行研究が多く、日本の近年のまとまった成果では Ding [2012] が詳しい分析を行っている。しかし同書と本書はその手法と目的で大きな違いがある。Ding [2012] は義烏の事例に「プラットフォーム」という概念を当てはめ、中国で発生した特色ある商業ネットワークの新しい解釈を試みている。フレームワークの細部に若干の疑問点は残るが、大胆な視角で中国の開放的な産業システムの現代的な普遍性を主張した^(註1)。一方、本書では論理的な一貫性と信頼性は強いが、そのような斬新さはあまり感じられなかった。無論、それは研究者の志向の違いであり、本書の欠点ではない。

本書は2000年代以降の新しい中国の産業発展を考察するうえで、注目すべき論点が多数詰まった、リアルで説得力のある、完成度の高い研究成果である。中国経済の研究者だけでなく、現代世界の産業やビジネスに関心をもつ多くの人々の世界観をアップデートするために広く供されるべきだと思う。

(注1) そのような中国の事例から産業発展や企業成長の一般的理論を抽出することを目指した日本での最近の優れた研究に Kimura [2014] がある。

文献リスト

〈日本語文献〉

黒田篤郎 2001. 『メイド・イン・チャイナ』東洋経済新報社.

〈英語文献〉

Ding, Ke 2012. *Market Platforms, Industrial Clusters and Small Business Dynamics: Specialized Markets in China*. Cheltenham: Edward Elgar.

Islam, Rizwanul 2008. "Has Development and Employment through Labour-Intensive Industrialization Become History?" in *Arguments for a Better World: Essays in Honor of Amartya Sen, Volume II : Society, Institutions, and Development*. ed. Kaushik Basu and Ravi Kanbur. Oxford: Oxford University Press.

Kimura, Koichiro 2014. *The Growth of Chinese Electronics Firms: Globalization and Organizations*. New York: Palgrave Macmillan.

Ohara, Moriki, M.Vijayabaskar, and Hong Lin eds. 2011. *Industrial Dynamics in China and India: Firms, Clusters, and Different Growth Paths*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Rodrik, Dani 2016. "Premature Deindustrialization." *Journal of Economic Growth* 21(1): 1-33.

Sugihara, Kaoru 2007. "The Second Noel Butlin Lecture: Labour-intensive Industrialization in Global History." *Australian Economic History Review* 47(2): 121-154.

(龍谷大学経済学部准教授)